期にかけてと考えられており、本堂に続いて再建されたと推測されます。寄棟造の楼門は珍しく、茅葺屋根と相俟って景観上重要な役割を果たしています。

並瀧寺庫裏

並瀧寺庫裏は、現存している棟札と建築様式から寛政 9(1797)年の建立であることが明らかになっています。桁行 10 間、梁間 6間、寄棟造、茅葺の大規模な建物です。屋根は現在鉄板で覆っています。向かって右手に座敷を配し、左手に土間を配置しますが、これは一般の農家とは逆向きになります。また、庫裏という性格上、中央部に仏堂内陣に相当する地蔵殿とその前方に礼拝の場である仏間が設けられています。右手の座敷は数寄屋造とし、床の間を配します。その奥には虎の間と呼ばれる部屋を配し、ここも数寄屋造とし、室床と呼ばれる床を設えています。この室床は、床框に螺鈿を施し、塼と呼ばれる素焼きのタイルを敷き詰めています。

鐘楼

鐘楼は、いわゆる龍宮造と呼ばれるものです。上層は方 1 間とし、華頭窓を開いています。棟札から文化元(1804)年の建築であることが明らかになっています。

鐘楼

仁王門

仁王門は、仁王像を後間に安置する形式の八脚門です。建立年代は明らかではありませんが、18 世紀末から 19 世紀初頭に再建されたと推測されます。明治頃に何らかの要因で大破したらしく、前半分の横架材をほとんど取り替えるとともに屋根についても形式の変更を受けています。

美術工芸品

木造延命地蔵菩薩半跏像

寄木造、彩色仕上げで、蓮華座に座し、左足を垂らす半跏像です。像高は頭頂から左足先まで 62 ㎝あり、右手に錫杖を持ち、左手は膝に置いて宝珠を載せています。寄木造ですが、目は彫眼としています。円光背と台座は当初からのものと思われ、彫法、彩色及び台座等の様式から、室町時代末期の作と考えられています。庫裏に安置されています。

唐絵涅槃像

涅槃とは、釈迦入滅を指す語で涅槃に入った 2 月 15 日を偲ぶ涅槃会の本尊として祀られてきました。本図は、縦 155 ㎝、横 114 ㎝の絹本に着色されたもので、唐時代の作品との伝承からその名があります。経典が説く一般的な涅槃の情景に従い、宝台上に横たわった釈迦の周囲に多くの弟子や動物まで釈迦の入滅を悲しむ姿が描かれます。ただし、釈迦の生母である摩耶夫人が一般的には右天上に描かれるのに対し、本図では左天上に描かれており、和様化が進行しています。また、裏面には宝永 6 (1709)年の修理銘があります。本図は、このような特徴や絵画の様式から、室町時代後半の作と考えられています。

表　指定文化財一覧

名　称	員数	指定年月日	区　分
唐絵涅槃像	1 幅	昭和 53 年 11 月 15 日	市重文
木彫延命地蔵菩薩半跏像	1 躯	昭和 57 年 5 月 22 日	市重文
並瀧寺本堂	1 棟	平成 29 年 9 月 28 日	市重文
附、本堂内厨子	1 棟		本堂 附
附、金毘羅社	1 棟		本堂 附
附、楼門	1 棟		本堂 附
附、棟札	2 枚		本堂 附
並瀧寺庫裏	1 棟	平成 29 年 9 月 28 日	市重文
附、鐘楼	1 棟		庫裏 附
附、仁王門	1 棟		庫裏 附
附、棟札	2 枚		庫裏 附

並瀧寺の文化財

唐絵涅槃像

木彫延命地蔵菩薩半跏像

東広島市教育委員会

並瀧寺の歴史と概要

並瀧寺は、志和町志和東字只に所在する古刹で、山号を金澤山といいます。現在は仁和寺を本山とする真言宗御室派に属しています。本尊は千手観音菩薩で、33 年に一度の御開帳です。

『志和町史』によれば、奈良時代の天平 5(733)年、聖武天皇の勅願により行基菩薩の開基と伝えられるとされます。また、志和東天野氏の記録である「右田毛利譜録」によれば、志和東天野氏の居城生城山城の四方堅の祈願所として西明寺、南禅寺、鎌倉寺とともに金澤山並瀧寺が筆頭に掲げられていました。

史料で寺院の存在が確認できるようになるのは、戦国時代の大永元(1521)年のことです。この年とその翌年、並瀧寺の住持弘範は志和東の領主天野興次を大檀那として志和堀の大宮八幡神社に懸仏(東広島市重要文化財)を寄進しています。しかし、大永 5 (1525)年、戦火に巻き込まれて並瀧寺の伽藍は焼け落ちたと伝えられます。

その後、志和東天野氏の庇護によって再建されますが、寛永 3 (1626)年にも火災にあい、さらに宝暦 7(1757)年には台風によって本堂が破損したと伝えられます。

明和 6(1769)年に始まる伽藍再建事業によって、明和 8 (1771)年に本堂が竣工し、楼門、庫裏と続き、文化元(1804)年に鐘楼が完成して再建事業は一段落しました。

並瀧寺は、古代以来の由緒を持つ寺院としては珍しく、丘陵の支尾根を階段状に削平して境内としています。また、現在も茅葺の建物が数多く残り、江戸時代以来の景観を良好に残している点でも貴重な存在となっています。

並瀧寺境内配置図

並瀧寺の文化財

建造物

並瀧寺本堂

並瀧寺本堂は、棟札写によって明和 8(1771)年の再建であることが知られます。規模は 3 間四方で、正面に 1 間の向拝を付けています。内部は、前側 1 間通りを外陣とし、後方 2 間を内陣とします。内陣には来迎壁を設けてその前に須弥壇を置き、その上に厨子を安置しています。天井は中央 1 間四方を鏡天井としており、雲龍を描いています。向拝の柱には石製の礎盤を用い、水引虹梁の木鼻は獏の丸彫り、手挟は雲龍の籠彫りとしています。

並瀧寺本堂（正面）

並瀧寺本堂は、唐様を主体とした密教本堂の遺構であり、意匠が優秀な上、屋根を重厚な茅葺屋根とするなど建立当時の姿をよく留めているところに特徴があります。

本堂内厨子

本堂内厨子は、明和 8 年の「奉再建立本尊御厨子一組」の棟札があり、本堂と同時の造立であることが分かります。また、別の板札には大坂の職人が造ったことが記されています。入母屋造柿葺きの屋根を備えた宮殿形式と呼ばれる本格的な厨子で、大坂の職人らしく洗練された意匠の厨子です。

本堂内厨子

金毘羅社

鎮守社の金毘羅社は、一間社流造と呼ばれる形式の茅葺屋根を持つ小社です。総角柱で組物もない簡素な建物ですが、建立年代が寛政 10 (1798)年と明らかな上、景観上でも重要な建物です。

金毘羅社

楼門

楼門は、下層を白漆喰で塗籠める、いわゆる龍宮造と呼ばれるものです。上層は桁行 3間、梁間 2 間の規模で、寄棟造、茅葺の屋根を載せています。建立年代は、建築様式上18 世紀中期から後

楼門（南から）

並瀧寺庫裏（北西から）